

速報

繁殖分布の周辺域におけるアカヒゲの生息状況 (I) *1

—大隅諸島黒島および大隅半島木場岳・稲尾岳における繁殖期の生息状況—

関 伸一*2

キーワード：アカヒゲ, 大隅諸島, 大隅半島, 繁殖期, 生息状況

I. はじめに

アカヒゲ *Erithacus komadori* はツグミ科の小鳥で、南西日本の固有種である。生息地がごく狭い地域に限定され、外来捕食者の影響による個体数減少も報告されているため、日本版レッドリストでは、沖縄島に分布する亜種ホントウアカヒゲ *E. komadori namiyei* が絶滅危惧IB類に、奄美群島～男女群島に分布する亜種アカヒゲ *E. komadori komadori* が絶滅危惧II類にそれぞれ指定されている（環境省, 2006）。アカヒゲが近年も継続的に記録され、繁殖していると推測されるのは男女群島の2島、トカラ列島の5島、奄美群島の5島、沖縄島の計13の島のみである（Seki *et al.*, 2007）。しかし、その周辺には、近年の観察記録がないか、調査が行われず生息状況が不明な地域として、大隅半島・黒島・硫黄島・屋久島・種子島・臥蛇島・上ノ根島・横当島があり（環境庁, 1981; Kawaji and Higuchi, 1989など）、保全のための現状調査が必要とされる。

一方、ミトコンドリアDNAの分析によれば、アカヒゲでは2亜種が遺伝的にも明確に分化した集団であるだけでなく、亜種アカヒゲの中に、それぞれ独自の遺伝子型で主に構成される4つの下位集団（男女群島・トカラ列島・奄美大島・徳之島）が存在することが示唆されている（Seki *et al.*, 2007）。系統地理学的な解析からは、更新世中期に琉球列島中部で分化したアカヒゲの祖先集団が、その後の分布拡大・再隔離・気候変動などの影響を受けた結果、島嶼群ごとに細分化された集団構造を持つに至ったと推測されている（Seki, 2006; Seki *et al.*, 2007）。このような集団構造の成立過程と琉球列島の地史との関連をより詳細に議論する上でも、それぞれの集団の分布を正確に把握することは重要となる。

ここでは、近年の生息状況が不明な地域のうち、トカラ列島と男女群島の間に位置し、アカヒゲの分布が大きく途切れた場所にあたる、大隅諸島の黒島および大隅半島の木場岳・稲尾岳において生息状況を調査した結果を報告する。

II. 材料と方法

調査地の大隅諸島の黒島および大隅半島の木場岳・稲尾岳の位置は図-1に示した。黒島は屋久島の北西約65km、大隅半島の南西約70kmに位置し、面積15.5km²、標高621.9mの島で、島の中央部はスタジイ *Castanopsis sieboldii* やタブノキ *Machilus thunbergii* などが優占する森林となっている。木場岳（標高890.8m）・稲尾岳（標高930m）は大隅半島の最南部に位置し、周辺にはアカガシ *Quercus acuta*、イスノキ *Distylium racemosum* などからなる照葉樹林が残されており、森林生態系保護地域や自然環境保全地域の指定を受けている（環境庁, 1986; 九州森林管理局, 2001）。

2つの調査地について、まず、アカヒゲの過去の生息状況を文献と聞き取りにより調査した。つづいて、2007年6月7日～8日に黒島、6月8日～9日に木場岳と稲尾岳で、アカヒゲの生息状況調査を行った。生息状況の確認では、森林周辺に任意に選定した観察点において、まず約2分間定点観察を行い、次にアカヒゲ

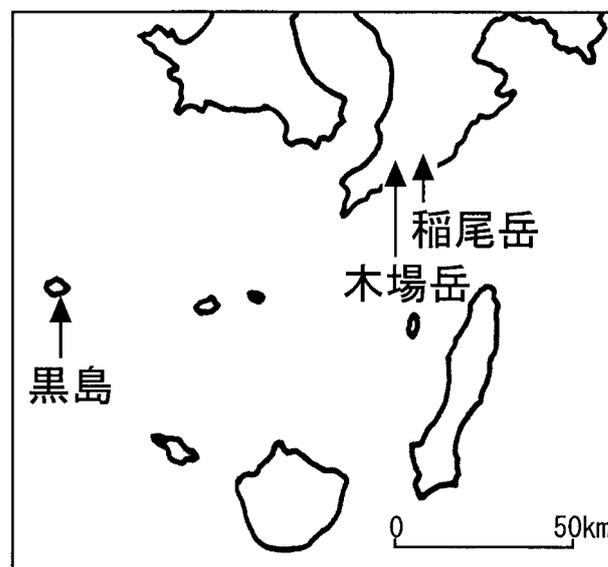


図-1. 調査地の位置

*1 Seki, S-I. : Recent status of the Ryukyu robin *Erithacus komadori* in outlying habitats (I) Kuro-shima in the Osumi Islands, Mt. Koba and Mt. Inao in the Osumi Peninsula

*2 森林総合研究所九州支所 Kyushu Res. Center, For. and Forest Prod. Res. Inst., Kumamoto 860-0862

のさえずりを30秒間再生して、その30秒後まで鳴き返しの有無を記録した。観察地点は、黒島では図-2に示した林道周辺の100地点、木場岳では登山口への林道と2.0kmの登山道周辺の25地点、稲尾岳では西ルート登山道3.3km周辺の35地点とした。これまでの知見から、繁殖期のアカヒゲはテリトリー防衛などのためのさえずり行動が盛んで、雌雄ともさえずりの再生音に非常によく反応する事がわかっている。今回用いた再生装置（最大0.5W×2）では、少なくとも観察地点の周囲100mの範囲にテリトリーを持つ個体はさえずりの再生音に反応すると考えられた。そこで、短期間でアカヒゲの生息の有無を確認するためには、地点あたりの調査時間をできるだけ短くし、調査地点数を多くするのが効果的であると考えて調査条件を決定した。また、調査時期の6月上旬は、成鳥は繁殖地に定着している一方で、巣立ち後間もない当年生まれの個体は出生地から移動していない時期にあたる。さえずりの再生にはトカラ列島中之島でMD録音した音声を用いた。

Ⅲ. 結果と考察

黒島に関する文献と聞き取り調査の結果、1960年代から80年代の記録4件が確認された（表-1）。現地調査では、雄成鳥1羽のみ確認できた。確認地点は島の北側の谷沿い斜面の照葉樹林で、

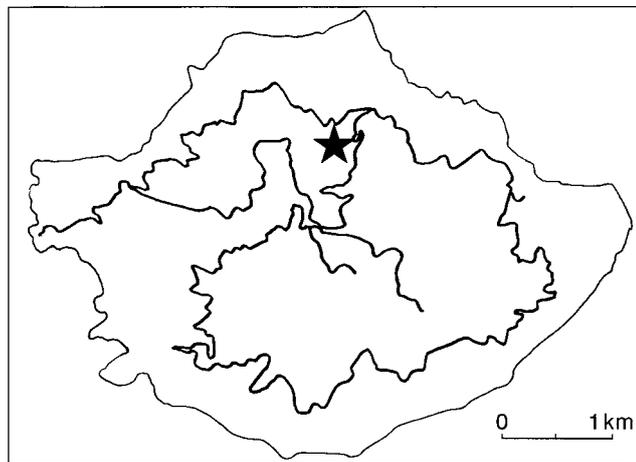


図-2. 黒島における調査路の配置（太い実線）
星印はアカヒゲが確認された地点

林床に竹が生えている場所であった（図-2）。雌は1羽も確認されず、繁殖の可能性を示唆する行動も認められなかった。2日間の調査中に黒島で記録された鳥類種は表-2に示した18種であった。

木場岳・稲尾岳においては、以前からアカヒゲの密猟があったとの伝聞情報は得られたが（小倉豪, 私信）、具体的な記録は2004年～2006年の繁殖期の末期（最終営巣の産卵が終了した時期）から秋の渡り期にかけての3件のみであった（表-3）。繁殖期の現地調査では、表-3に示した過去の記録地点の近傍も含め、アカヒゲの生息は全く確認できなかった。2日間の調査中にこの地域で記録された鳥類種は表-4に示した26種と外来種2種であった。

今回の結果から、黒島では過去にはアカヒゲが繁殖していた可能性があるが、現在の生息密度はごく低く、繁殖の可能性も低いと考えられた。また、過去に黒島で繁殖期の記録がある夏鳥2種、アカショウビン *Halcyon coromanda* とサンコウチョウ *Terpsiphone atrocaudata* が、今回の調査では全く確認できなかった。これら2種については、聞き取り調査で複数の島民から過去の生息を確

表-2. 黒島において記録された種

| 科 | 種名 | |
|---------|---------|------------------------------|
| カツオドリ科 | カツオドリ | <i>Sula leucogaster</i> |
| サギ科 | アマサギ | <i>Bubulcus ibis</i> |
| タカ科 | トビ | <i>Milvus migrans</i> |
| | ハイタカ | <i>Accipiter nisus</i> |
| | ノスリ | <i>Buteo buteo</i> |
| ハト科 | カラスバト | <i>Columba janthina</i> |
| カッコウ科 | ホトトギス | <i>Cuculus poliocephalus</i> |
| ブッポウソウ科 | ブッポウソウ | <i>Eurystomus orientalis</i> |
| ツバメ科 | ツバメ | <i>Hirundo rustica</i> |
| ツグミ科 | アカヒゲ | <i>Erithacus komadori</i> |
| | イソヒヨドリ | <i>Monticola solitarius</i> |
| ウグイス科 | ウグイス | <i>Cettia diphone</i> |
| | セッカ | <i>Cisticola juncidis</i> |
| ヒタキ科 | キビタキ | <i>Ficedula narcissina</i> |
| シジュウカラ科 | ヤマガラ | <i>Parus varius</i> |
| メジロ科 | メジロ | <i>Zosterops japonicus</i> |
| スズメ科 | スズメ | <i>Passer montanus</i> |
| カラス科 | ハシブトガラス | <i>Corvus macrorhynchos</i> |

表-1. 黒島におけるアカヒゲの記録

| 時期 | 場所 | 記録状況 | 文献 |
|-------------|--------|-----------|--------------------------|
| 1960年代 | 黒島 | ♀1羽を捕獲・飼育 | 日高一也（私信） |
| 1981. 5. 16 | 黒島カブリ岳 | さえずりを録音 | 鹿児島県（1987） |
| 1984以前 | 黒島えびす山 | 不明 | 鹿児島県（1987） |
| 1989以前 | 黒島 | 夏にさえずり | Kawaji and Higuchi（1989） |

表-3. 大隅半島南部におけるアカヒゲの記録

| 時期 | 場所 | 記録状況 | 文献 |
|------------------|---------|----------------|--|
| 2004. 7. 15 | 肝属町 | センサーカメラで幼鳥を撮影 | 曾根ほか（2006） |
| 2005. 8. 28-9. 3 | 南大隅町木場岳 | 地鳴き、目撃、♂♀各1羽捕獲 | Seki and Ogura（2007）, Fergus Crystal（私信） |
| 2006. 8. 20 | 南大隅町木場岳 | ♂1羽捕獲 | Seki and Ogura（2007） |

表-4. 木場岳・稲尾岳において記録された種

| 科 | 種名 | |
|----------|---------|---------------------------------|
| キジ科 | ヤマドリ | <i>Syrnaticus soemmerringii</i> |
| ハト科 | キジバト | <i>Streptopelia orientalis</i> |
| カッコウ科 | カッコウ | <i>Cuculus canorus</i> |
| | ホトトギス | <i>Cuculus poliocephalus</i> |
| フクロウ科 | コノハズク | <i>Otus scops</i> |
| キツツキ科 | アオゲラ | <i>Picus awokera</i> |
| | コゲラ | <i>Dendrocopos kizuki</i> |
| セキレイ科 | キセキレイ | <i>Motacilla cinerea</i> |
| サンショウクイ科 | サンショウクイ | <i>Pericrocotus divaricatus</i> |
| ヒヨドリ科 | ヒヨドリ | <i>Hypsipetes amaurotis</i> |
| ミソサザイ科 | ミソサザイ | <i>Troglodytes troglodytes</i> |
| ツグミ科 | コマドリ | <i>Erithacus akahige</i> |
| | トラツグミ | <i>Zoothera dauma</i> |
| ウグイス科 | ヤブサメ | <i>Urosphena squameiceps</i> |
| | ウグイス | <i>Cettia diphone</i> |
| ヒタキ科 | キビタキ | <i>Ficedula narcissina</i> |
| | オオルリ | <i>Cyanoptila cyanomelana</i> |
| エナガ科 | エナガ | <i>Aegithalos caudatus</i> |
| シジュウカラ科 | ヒガラ | <i>Parus ater</i> |
| | ヤマガラ | <i>Parus varius</i> |
| | シジュウカラ | <i>Parus major</i> |
| メジロ科 | メジロ | <i>Zosterops japonicus</i> |
| ホオジロ科 | ホオジロ | <i>Emberiza cioides</i> |
| アトリ科 | カワラヒワ | <i>Carduelis sinica</i> |
| カラス科 | カケス | <i>Garrulus glandarius</i> |
| | ハシブトガラス | <i>Corvus macrorhynchos</i> |

* 外来種のコジュケイ *Bambusicola thoracicus* およびソウシチョウ *Leiothrix lutea* も記録された。

認ることができたが、アカヒゲについては情報が得られなかった。アカヒゲ、アカシヨウビン、サンコウチヨウの3種は、いずれも鳴き声に特徴があり、姿が人目につきやすく、鳥嶼では集落周辺の環境にも生息する種である。したがって、聞き取り調査結果の違いは、黒鳥におけるアカヒゲの生息密度が以前から高くなかったために生じたものと推測された。

大隅半島南部の照葉樹林におけるアカヒゲの記録は、繁殖期の末期から秋の渡り期に限定されており、これまでのところ営巣が考えられる時期の記録はない。今回の6月の調査でも生息を確認できなかった。また、写真記録や捕獲記録で齢査定可能だった個体は、いずれも全身または体の一部に幼羽の残る幼鳥または若鳥(当年生まれの個体)であった。さらに、Seki and Ogura (2007)

は、大隅半島南部で捕獲された2羽の若鳥についてミトコンドリアDNAの塩基配列を分析し、コントロール領域の遺伝子型がトカラ列島集団のものと共通であることを報告している。これまでに得られた情報からは、この地域で確認されている個体は、当年生まれの個体がトカラ列島から一時的に漂行または分散したものである可能性が高いと考えられた。

また、木場岳・稲尾岳地域は森林生態系保護地域、自然環境保全地域など、貴重な植物群落を保全するための指定を受けているが、鳥類群集に関する資料はこれまでのところ秋から冬に限られており(環境庁, 1986; 鹿児島県立博物館, 1997)、繁殖期のデータはない。そのため、この地域での記録が文献上に見つからなかった7種(カッコウ *Cuculus canorus*, ホトトギス *C. poliocephalus*, コノハズク *Otus scops*, コマドリ *E. akahige*, ヤブサメ *Urosphena squameiceps*, キビタキ *Ficedula narcissina*, オオルリ *Cyanoptila cyanomelana*)が、今回のごく短期間の調査でも新たに記録された。この地域の繁殖鳥類群集を明らかにするためには、今後、継続的な調査が必要であろう。

本研究を行うにあたり、日高一也氏および小倉豪氏には貴重な情報を提供いただいた。ここに厚く御礼申しあげる。この研究の一部は科学研究費補助金(課題番号17780130)によって行われた。

引用文献

- 鹿児島県(1987) 鹿児島県の野鳥. 99pp. 鹿児島県, 鹿児島.
- 鹿児島県立博物館(1997) 大隅の自然. 89pp. 鹿児島県立博物館, 鹿児島.
- 環境省(2006) レッドリスト鳥類. 環境省, 東京. [http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=7849]
- 環境庁(1981) 昭和55年度特殊鳥類調査. 131pp. 環境庁, 東京.
- 環境庁(1986) 稲尾岳自然環境保全地域調査報告書. 233pp. 環境庁, 東京.
- Kawaji, N. and Higuchi, H. (1989) J. Yamashina Inst. Ornithol. 21: 224-233.
- 九州森林管理局(2001) 大隅半島緑の回廊における保全・整備方策調査報告書. 146pp. 九州森林管理局, 熊本.
- Seki, S.I. (2006) Mol. Phylogenet. Evol. 39: 899-905.
- Seki, S.I. and Ogura, T. (2007) Ornithol. Sci. 6: 21-27.
- Seki, S.I. et al. (2007) Mol. Ecol. 16: 101-113.
- 曾根晃一ほか(2006) 九州森林研究 59: 197-200.
- (2007年11月19日受付; 2008年1月7日受理)